

もっともらしい理由の利用可能性が 自己報告に与える影響

—経路選択課題を用いた検討—

山田 歩

人間文化学部生活デザイン学科助教

目 的

なぜそうしたのか。なぜそう思うのか。日々の生活において、また、アンケートやインタビューを用いた調査において、行動や思考の理由をたずねることは少なくない。回答者に自由に理由に述べてもらうこともあれば、予め用意しておいた選択肢から理由を選んでもらうこともあるだろう。このように、回答者が自身の行動や思考を振り返って、意識的に何らかの説明を行うことを自己報告(self-report)と呼ぶ。質問を行うとき、質問者は、回答者が自身の行動と思考のプロセスを意識的に辿りそれを言葉にできることを想定している。回答者から得られた自己報告は、行動と思考の背景を探る重要な手掛かりになると考えられているわけである。

しかしながら近年、本人による意識的な自己報告だけに頼ってはいは、行動や思考の背景にある心の働きを十分に理解することはできないのではないかという懸念が、心理学を中心とした、意識と行動の関連に焦点をあてた研究領域において広まりつつある(山田, 2015; 2019)。こうした自己報告への懸念は、Nisbett & Wilson (1977)による問題提起によって、学術的問として強く認識されるようになった。彼らは、先行研究のレビューに加え、自らもいくつかの実験を行うことで、自己報告される行動の理由とその行動を実際に左右する要因の間に大きなズレが生じることが少なくないことを体系的に論じた。

たとえば、Wilson & Nisbett (1978)が行った実験の1つでは、商品選択と選択理由の関連が検証された。彼らは、一般の買い物客を実験参加者とし、4つのテーブルに置かれたストッキングから最も品質の良いものを選ぶように求めた。ただし、実験参加者には伝えられなかったことだが、実際には同じストッキングが4つ並べられていた。実験の結果、右側のテーブルに置かれたストッキングほど選択されやすいことが観察された(ストッキングの選択率は、左から順に12%、17%、31%、40%)。この選択傾向からは、ストッキングそれ自体ではなく、ストッキングの置かれた位置が実験参加者の選択に

影響を与えていたことが分かる。しかし、調査員が参加者に選択理由をたずねたところ、参加者の多くは「伸縮性が良いから」といったようにストッキングの特性に着目して選択を説明する強い傾向を示した。さらに、ストッキングの位置から影響を受けた可能性はあるかという質問を受けても、参加者全員がその可能性を否定した。参加者は自分がどのようにストッキングを選んでいたのか極めて不正確な認識しか持っていなかったと考えられる。

WilsonとNisbettは、ストッキングの置かれた位置によって選ばれやすさが変わったのは、参加者がストッキングを手にとった順番とそこで採用された選択方略が関係していたからではないかと解釈している。ストッキングは左からA、B、C、Dという順序でラベルがついていたため、買い物客の多くは左から順にストッキングを手にとっていった。手にとったストッキングがこれまでのストッキングと劣らなければ、そのストッキングを選んで選択を済ませばよい。何かしらの理由で最後に手にとったストッキングに満足しなければ、1つ手前のストッキングに戻る。そのストッキングで問題なければ、それを選んで選択を済ませるが、それでも納得しなければさらに1つ手前のストッキングに戻る。このような決定プロセスがとられることで、実験参加者全体で、より後に(つまり、右に)置かれたストッキングほど選ばれやすくなった、と解釈された。そして、WilsonとNisbettは、参加者がこのような決定プロセスを自覚できないため、ストッキングの伸縮性など、いかにも自らの選択を左右していそうなことに注目し、理由を説明したのではないかと解釈した。

選択や決定プロセスの自覚の欠如に伴う不正確な自己報告は、さまざまな選択状況において確認されている(Wilson, 2002)。選択者はしばしば、ある要因から受けている影響に気づかないまま、また、自らが採用している決定プロセスを自覚しないまま、判断や決定を行う。このようなとき、選択の規定因を正確に同定することは難しい。選択の理由を求め

られた選択者はしばしば、選択と関連のない要因に注目し、実際に選択を左右している重要な要因を見逃してしまう。いくつかの先行研究からは、選択の規定因への自覚を欠いた選択者は、理由の説明を求められると、原因としてもっともらしく、言語化が容易で、心の中で利用しやすい要因に注目しやすいことが指摘されている (Wilson & Schooler, 1991; Yamada et al, 2014)。こうした条件を満たさなければ、実際に選択を左右していても、その要因は、選択者が考える理由の候補から漏れやすくなり、このような条件を満たす要因が容易に利用できる環境では、真の規定因はますます見逃されやすくなると推測される。

しかし、自己報告がどのような要因に導かれやすいのかに関するこうした説明は、十分な実証的検証を受けてこなかったと指摘できる。たとえば、先のストックキングを用いた Wilson & Nisbett (1978) の実験では、参加者は、確かに、「もっともらしく、言語化が容易で、利用しやすい要因」に着目して自己報告を行っているように見える。しかし、これは状況証拠からそのように推測されているだけであり、これらの要因が実際に自己報告に影響を与えた明確な証拠は示されていない。これらの要因が実際に自己報告を方向づけると言うのであれば、これらの要因を実験的に制御し、自己報告に効果を及ぼしていることを実証することが重要となるだろう。そこで、本研究ではこれらの要因の利用可能性を実験的に操作し、選択者の自己報告がどのように変化するかを検証することにした。

本研究で取り上げるのは同一物間選択 (identical options) と呼ばれる選択状況である。同じモノが選択肢として複数あるとき、その中から意思決定者がどのように1つの選択肢を選ぶのかという問題が理論的考察の対象となる。たとえば、同じ商品が左右に並んでいるとき買い物客はどちらを選ぶのかといった選択状況や、目的地までの距離と曲がる回数が等しい経路が複数あるとき歩行者はどの経路を選ぶのかといった選択状況が、同一物間選択を検証する典型的な実験場面として挙げることができる。選択によって得られる結果に注目すれば、それぞれの選択肢は等しい価値を持つ。選択者が選択肢の価値のみに注目して決定を行うとすれば、選択肢は等しい割合で確率的に選択されることが予測される。しかし、現実の選択では、こうした予想に反して、選

択肢の位置によって選ばれやすさに違いが生じることがしばしば確認される (網中, 1984; Attali & Bar-Hillel, 2003)。選択者はしばしば、最初のいくつかだけ検討し選択を打ち切ったり、見直しや後戻りすることなく選択を終えたり、一部の選択肢を考慮対象から外したりすることで、選択にかかる時間や労力を軽減することを試みる。こうした選択方略は、選択肢の置かれた位置と選ばれやすさの関係に一定の傾向をもたらすことになる。

Christenfeld (1995) は、歩行路の同一物間選択において、経路位置が経路選択に影響することを報告している。彼は、出発地と目的地を結ぶ経路が複数ある地図および現実空間において、どの経路が移動に利用されやすいか調べた。選択対象となる経路は出発地から目的地に至るまでの距離と曲がり角の数が等しく、曲がる位置だけが異なっていた。その結果、出発地から進行方向に沿って最初あるいは最後に位置する角を曲って移動する経路が選ばれやすいことが確認された。

こうした偏りは心的労力を最小化する2つの方略によってもたらされたと説明されている。経路選択においては、分岐点が現れるたびに決定を行うことになる。こうした逐次的な決定が続く選択状況では、その都度判断を行うよりも、最初に曲がり後は考えない、もしくは最後の曲がり角まで曲がることを考えないという方略を採用することで、選択全体にかかる心的労力が軽減される。こうした2つの方略が採用されることで、両端の経路へ選択が集中することになる。

本研究では、経路の同一物間選択において選択者が行う選択理由の説明を取り上げる。特に、もっともらしい理由の存在が選択者の選択理由の説明に与える影響に焦点をあてる。先の議論からは、理由としてもっともらしい要因が容易に利用できる環境は、原因の取り違えが誘発されやすくなる一方、そうした誤った因果的推論を導く要因がなければ、実際の規定因が正しく同定される可能性が高まると予想される。

こうした予想を検証するために、経路への選好をいかにも左右するよう見える要因が容易に利用できる地図とそうでない地図を作成した。もっともらしい要因の利用可能性は、経路上に店舗や施設などの建造物を配置することで操作された。経路沿いに並ぶ店舗や施設は、経路ごとの特徴を際立たせた

め、特定の経路を選択したり避けたりするもっともらしい理由として知覚されやすいと考えた。経路位置が選択に及ぼす影響を自覚していなければ、選択者は個々の店舗の魅力や店舗全体が作り出す雰囲気によって、自らの選択を説明すると予想した。それに対して、経路の位置の他に経路間の違いを見出すことができない環境であれば、選択者は自らの選択を経路位置と関連付けて捉えやすくなると予想した。

加えて、本研究では、選択者が真の規定因として取り違えた要因に与える評価についても焦点をあてる。選択と記憶に関する研究からは、選択に関する記憶は、決定した選択と整合する方向に歪むことが確認されている。たとえば、選択者はしばしば自らが選んだ選択肢は実際以上によい属性を持っていたと誤った想起をする (Mather, Shafir, & Johnson, 2000; 2003)。本研究は、こうした知見を発展させ、取り違えられた要因についても、選択者は自らの選択に沿って歪んだ評価を与えるという可能性を検討する。経路上の店舗や施設の違いが選択の決め手であったと考える選択者は、実際には位置によって選択されやすくなった経路にある建造物を高く評価し、その他の経路にある建造物を低く評価することになると予想した。

方法

材料

地図とそれを用いたいくつかの質問から構成される調査用紙を作成した。地図には、出発地と目的地を結ぶ経路に店舗や施設が描き込まれたものとそうでないものを用意した。

店舗なし地図 架空の市街地の地図が作成された。地図は縦約10cm × 横約12cmの領域に描かれた。道路は実線であらわされ、店舗や施設は点で示された。地図上に記された駅を出発地とし、目的地は大学に設定した。出発地から目的地へ移動するのに、曲がり角の数と距離が等しい3つの経路がある。これら3つの経路の途中には店舗や施設は並ばない。出発地から進行方向に沿って進み最初の曲がり角を左折したときに現れる通りをC通り、次の曲がり角を左折したときに現れる通りをB通り、最後の曲がり角を左折して通る道をA通りと名づけた。

店舗あり地図 店舗なし地図の出発地と目的地を結ぶそれぞれの経路に、店舗と施設を描き加えた地図である。各経路には、店舗あるいは施設が2種類ず

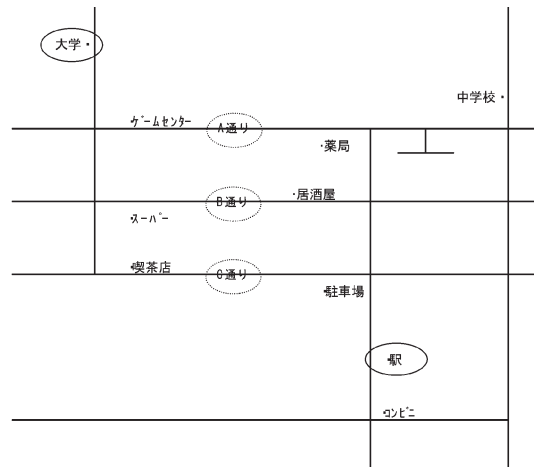


図1 店舗あり条件の地図の例

つ配置された。新たに配置される店舗・施設は、その前を通りたいと思われる程度がほぼ等しくなるように複数の候補の中から選定した。予備調査として、本調査に参加しない学生に、複数の店舗と施設について、その前をどれくらい通りたいと思うか質問した (-3 = 全く通りたくない, +3 = 非常に通りたい)。予備調査の結果にもとづき、これらの評定平均値がほぼ等しくなるように、店舗および施設を組み合わせ、3つの店舗ペアを作った(3つのペアは、“薬局・ゲームセンター”、“スーパー・居酒屋”、“喫茶店・駐車場”である)。次に、これらの店舗ペアをラテン方格に従い3つの経路に配置し、3つの経路に対してそれぞれの店舗ペアが均等に配置された3種類の地図が作成された(図1)。

参加者

店舗なし地図を用いた経路選択課題には48名(女 = 27名, 男 = 21名, 平均年齢 = 19.3歳)の学生が回答した(店舗なし条件)。店舗あり地図を用いた経路選択課題には128名(女 = 88名, 男 = 40名, 平均年齢 = 20.6歳)の学生が回答した(店舗あり条件)。店舗あり条件の参加者は、3種類の地図課題のうちいずれか1つがランダムに割り振られた。

手続き

大学の講義の時間に調査用紙を一斉に配布し受講生に回答を依頼した。“歩行者の通行経路に関する調査”という名目で調査への協力を依頼した。調査用紙を受け取った参加者は、紙面上の教示に従いそれぞれのペースで以下の質問に順に回答した。調査

参加者は後日、講義の中でデブリーフィングを受けた。

経路の選択 地図で示した街中を歩いて移動する場面を想像するように求めた上で、出発地と目的地を指定し、出発地の駅から目的地の大学まで行くために通る道を3つの通りから選択するように求めた。

選択理由の自由記述 次に、なぜその道を選んだのか、その理由を自由に記述させた。店舗なし条件の参加者は、この段階で全回答が終了となった。

店舗への評価 店舗あり条件の参加者には、選択理由の自由記述に次いで、3つの通りに配置された店舗と施設の全てについて、その前をどれくらい通りたいと思うかについて回答を求めた（-3 = 全く通りたいくない、+3 = 非常に通りたい）。店舗あり条件の参加者は、この段階で全回答が終了となった。

結果

経路選択 各通りが選ばれた度数を表1に示す。先行研究(Christenfeld, 1995)と一致し、最初あるいは最後の曲り角を利用する経路に選択が集中した(店舗なし条件： $\chi^2 = 19.5, p < .01$ 、店舗あり条件： $\chi^2 = 23.2, p < .01$)。しかし、予想に反して、経路の位置ばかりでなく、そこに配置された店舗・施設の情報も、経路の選択に一定の影響を与えることが確認された。すなわち、数値上は、3つの店舗配置条件全てにおいて中央のB通りが最も避けられたが、“喫茶店・駐車場”がB通りに配置された条件ではこの選択の偏りは有意ではなく($\chi^2 = 2.1, ns$)、それ以外の配置条件において有意だった($\chi^2 > 14.5, ps < .001$)。店舗・施設を選定するために実施した予備調査では、より多くの店舗・施設を用いて参加者に評価を求め、その中で評価が概ね等しかったものを選定したが、限定された店舗・施設のみに評価を求めた本実験では予備調査とは全体的な評価基準が変わり、店舗・施設への評価にバラつきが生じたの

だと考えられる。

選択理由 記述された回答に含まれる選択理由を拾い出し、それぞれの理由を、以下のカテゴリのいずれかに分類した。

- (1)店舗に基づく理由：地図上の店舗あるいは施設が備える性質に基づいた理由(例：ゲームセンターの前はうるさそうだから)。
- (2)位置に基づく理由：経路の空間的位置に関する言及が含まれた理由。このカテゴリはさらに、“空間的位置への言及にとどまるもの”と(例：最初の曲がり角だから)、“心理的な効果まで言及するもの”に分けられた(例：最初に曲がれば楽だから)。
- (3)不明確な理由：回答者の意味する内容が明確でない理由。特に、位置に基づく理由か店舗に基づく理由か明瞭でない理由(例：人が少なそうだから)。
- (4)理由なし・理由でない回答：積極的な理由が述べられなかった回答(例：なんとなく)および感想など選択理由と無関連な回答。

回答の中に複数の理由が記述されていれば、理由ごとにいずれかのカテゴリに分類した。ただし、同一人の回答の中に、同じカテゴリの理由が複数含まれるときは、重複してカウントせず、まとめて1件と数えた。分類は2人の分類者が独立に行った($\kappa = 0.98$)。

“理由なし・理由でない回答”カテゴリに分類された回答は理由とはみなさず分析から除外した。その結果、店舗なし条件では延べ41件の選択理由、店舗あり条件では延べ136件の選択理由が得られた。条件ごとに選択者が報告した理由の種類の内訳を表2に示す。

参加者が報告する選択理由は、選択を行った環境で利用できるもっともらしい理由の存在に大きく左右されることが確認された。店舗なし条件の参加者が報告する理由の大半は、位置に基づく理由に集中したのに対して、店舗あり条件の選択者は、位置に

表1 経路が選択された度数

通りに配置された店舗・施設	A 通り	B 通り	C 通り	計
【A: 薬局・ゲームセンター】 【B: スーパー・居酒屋】 【C: 喫茶店・駐車場】	14	2	26	42
【A: 喫茶店・駐車場】 【B: 薬局・ゲームセンター】 【C: スーパー・居酒屋】	25	5	13	43
【A: スーパー・居酒屋】 【B: 喫茶店・駐車場】 【C: 薬局・ゲームセンター】	17	10	16	43
【A: 店舗なし】 【B: 店舗なし】 【C: 店舗なし】	26	2	20	48

表2 報告された選択理由

	店舗あり	店舗なし
店舗に基づく理由	84 (61.7)	3 (7.3)
位置に基づく理由 (位置への言及のみ)	22 (16.2)	11 (26.8)
位置に基づく理由 (心理的効果含む)	23 (16.9)	22 (53.7)
不明確な理由	7 (5.1)	5 (12.2)
計	136 (100.0)	41 (100.0)

注：度数(割合)

基づく理由よりも、店舗に基づく理由に大きく偏った説明を行った。

店舗に基づく理由は、それらがなければ報告されたかもしれない位置に基づく理由に代わって報告されたといえる。位置に基づく理由を挙げた1人あたりの件数は、店舗なし条件では0.69件、店舗あり条件では0.35件であった。

店舗あり条件において、店舗に基づく理由だけを報告した計70名が選択した経路は、A通りが41.43%、B通りが22.86%、C通りが35.71%であった。店舗への評価 店舗の前の通りやすさについての評価点をペアごとに合算した値を、配置された通りごとに図2に示す。数値上はいずれの店舗・施設ペアも、A通り及びC通りに配置されたときに比べ、B通りに配置されたときのほうが、その前を通りたくないという評価を受けたが、この傾向は統計的に有意なレベルには至らなかった($F(2, 127) = 1.87, p = .16$)。また、3つの店舗配置条件ごとに、ペアの種類を独立変数とした1要因3水準の分散分析を行った結果、“喫茶店・駐車場”は、A通り及びC通りに配置されているとき、他の店舗・施設ペアよりも有意に高く評価されたが($F_s > 8.22, ps < .001$)、B通りに配置されていたときは、その差は有意ではなくなった($F(2, 128) = 2.01, ns$)。この結果は、参加者は、店舗自体の誘因性に加えて、それらが配置された位置がもつ誘因性に引き寄せられて、店舗を評価していたことを示唆する。

考 察

経路の位置によって選択に偏りが生じることが確認された。実験参加者は、距離と曲がる回数が等しいにも関わらず、出発してから最初もしくは最後に曲がる経路を通ることを好み、その間に位置する経路を避ける傾向を示した。こうした位置による選択

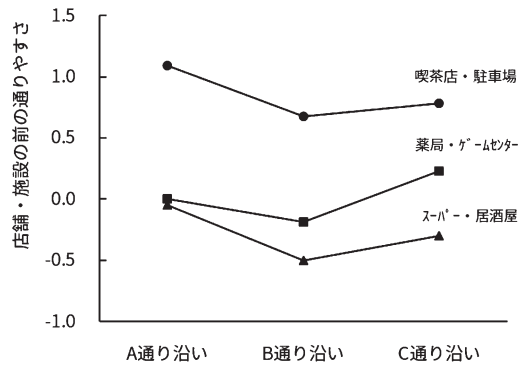


図2 店舗・施設の前の通りやすさの評定平均値

の偏りは、経路沿いに店舗や施設が配置されていないときばかりでなく、配置されているときにも見られ、経路位置が経路の選択を強く方向付けることが確認された。

もちろん、経路沿いに並ぶ店舗や施設が経路の選択を左右することもあるだろう(紙野・舟橋, 1992)。本研究においても、経路沿いに並ぶ店舗・施設が選択に影響を与えていた。しかし、店舗と施設が経路選択に果たす役割は強調されて認知される傾向にあった。店舗・施設の有無によって選択される経路はあまり変わらなかったにもかかわらず、参加者が報告する選択理由は店舗や施設に集中する傾向にあった。こうした傾向は、参加者が自らの選択プロセスを自覚しておらず、選択の規定因を選択環境内の手がかりから探り当てようと試みたことをあらわしている。

参加者が報告する選択理由の大半は店舗や施設に集中したとはいえ、経路位置と関連した理由が少なからず挙げられていたことには注意を払うべきだろう。本実験で見られたこうした選択理由としての位置への言及は、Wilson & Nisbett (1978)の買い物客が誰一人としてストッキングの位置を選択理由に挙げなかったことと対照的である。こうした研究間の不一致は、空間上の位置が選択を左右する要因に見えるもっともらしさが選択課題によって変わることを反映していると考えられる。ストッキングのような商品選択においては、商品の置かれた位置は、選択と関係ないとみなされやすいのに対して、歩行経路の選択のように、まさに移動する空間上の位置が問題になる選択状況においては、空間上の位置が選択を左右する要因としてもっともだと認知されやすかったと考えられる。

また、経路位置に依存した決定を行ったことに気づく程度は、その時に利用できる他の潜在的な原因

の存在によって左右されることが示唆された。店舗あり条件の参加者は、店舗なし条件の参加者と比べ、経路位置と関連した選択理由を報告しなかった。このことは、選択をもっともらしく説明できる要因が容易に利用できる環境では、実際の規定因が選択者から見落とされやすくなることを示唆する。いかにも選択を左右するように見える要因は、他の要因が選択に影響を与えている可能性を自覚させにくくする可能性が考えられよう。

店舗や施設への評価は、それらが配置された経路の位置によって変動することが確認された。選択者は、自分の決定因果関係を作り出すと考える要因間に、筋の通った説明が与えられるよう動機づけられると考えられる。そのため、選択を左右しているように見える要因に対して、選択内容と整合する方向に評価を与えたと考えられる。店舗や施設の違いが選択を決定づけたと考えた選択者は、後付けの推論に基づいて、選択結果に整合するようにそれらの誘因性を評価したと考えられる。

本研究で得られたいくつかの知見を、現実の空間で検証することは意義のあることだろう。現実の歩行空間には、選択を理由づける要因が多く存在する。こうした環境では、誤った因果的推論が誘発されやすく、実際の規定因をますます正確に同定できなくなるかもしれない。理由をたずねられた歩行者は、本研究で示された以上に、選択理由を正確に述べるのが困難になることが予想される。都市整備を目的とした調査などで収集される“歩行者の声”には、実際に歩行者の満足や不満を左右する要因ばかりでなく、単にそのように思い込まれている要因も多く混入している可能性が容易に想像できるだろう。選択を左右する要因への自覚を弱めたり、誤った自己報告を誘発しやすい条件を同定していくことで、経路選択を支える意識的な決定プロセスと非意識的な決定プロセスのそれぞれの役割と性質を明らかにできるだろう。

* 本研究は科学研究費補助金(若手研究(B)課題番号18730389)の補助を受けた。

引用文献

網中政機(1984). 投票用紙における位置の効果—特に最高裁判所裁判官の国民審査制に関連して—

- 小林昭三(編) 憲法における制度と思想 清水望先生還暦記念 成文堂 pp.325-343.
- Attali, Y., & Bar-Hillel, M. (2003). Guess where: The position of correct answers in multiple-choice test items as a psychometric variable. *Journal of Educational Measurement*, 40, 109-128.
- Christenfeld, N. (1995). Choices from identical options. *Psychological Science*, 6, 50-55.
- 紙野桂人・舟橋國男(1992). 歩行経路の選択 長山泰久・矢守一彦(編) 応用心理学講座6 空間移動の心理学 福村出版 pp.60-82.
- Mather, M., Shafir, E., & Johnson, M. K. (2000). Misremembrance of options past: Source monitoring and choice. *Psychological Science*, 11, 132-138.
- Mather, M., Shafir, E., & Johnson, M. K. (2003). Remembering chosen and assigned options. *Memory & Cognition*, 31, 422-433.
- Nisbett, R. E., & Wilson, T. D. (1977). Telling more than we can know: Verbal reports on mental processes. *Psychological Review*, 84, 231-259.
- Wilson, T. D. (2002). *Strangers to Ourselves: Discovering the Adaptive Unconscious*. Belknap. (ウイルソン T. D. 村田光二(監訳) (2005). 自分を知り自分を変える—適応的無意識の心理学—新曜社)
- Wilson, T. D., & Nisbett, R. E. (1978). The accuracy of verbal reports about the effects of stimuli on evaluation and behavior. *Social Psychology*, 41, 118-131.
- Wilson, T. D., & Schooler, J. W. (1991). Thinking too much: Introspection can reduce the quality of preferences and decisions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 181-192.
- 山田歩(2015). 無意識と潜在過程 外山みどり(編) 社会心理学—過去から未来へ—北大路書房 pp.160-178.
- 山田歩(2019). 選択と誘導の認知科学 新曜社
- Yamada, A., Fukuda, H., Samejima, K., Kiyokawa, S., Ueda, K., Noba, S., & Wanikawa, A. (2014). The effect of an analytical appreciation of colas on consumer beverage choice. *Food Quality and Preference*, 34, 1-4.